

7 課

5月16日

言語、聖句、文脈



安息日午後 5月9日

今週のテーマ

暗唱聖句

「この律法の書をとって、あなたがたの神、主の契約の箱のかたわらに置き、その所であなたにむかってあかしをするものとしなさい……。」(申命記 31:26、口語訳)

「この律法の書を取り、あなたたちの神、主の契約の箱の傍らに置き、あなたに対する証言としてそこにあるようにしなさい……。」(申命記 31:26、新共同訳)

今週の聖句

申命記 32:46、47、列王記上 3:6、民数記 6:24～26、
創世記 1:26、27、2:15～23、15:1～5

世界の何十億もの人々の間で、6000以上の言語が話されています。聖書全巻は600以上の言語に翻訳され、新約聖書といくつかの書巻は、さらに2500以上のほかの言語でも訳されています。本当に多くの言語です。しかしそうは言っても、世界中で知られている言語の半分にもいまだ及びません。

およそ15億の人は、彼らの自国語に翻訳された聖書を一切持っていません。なすべき仕事はまだたくさんありますが、聖書協会の努力によって、60億の人が聖書を読めるようになりました。

自国語の聖書があるというのは、なんと祝福でしょう！ 私たちはしばしばそのことを当たり前のように思っていますが、そう思うのは、多くの人が聖書を持っていないことや、ヨーロッパでは何世紀にもわたって、聖書が意図的に大衆から遠ざけられていたことを忘れているからなのです。印刷機と宗教改革のおかげで、もはやそういう状況ではありません。聖書を持つことができた私たちは、“霊”に満たされて、御言葉の研究の仕方や聖書に啓示されている主を知る方法について学んでいきます。

問1 IIテモテ3:16、17を読んでください。聖書が私たちに与えられたのは、どのような目的のためですか。

聖書は、歴史の中における神の業、つまり罪に堕ちた人類の救済計画をあかすものとして、またあらゆる方法で私たちが義に導く訓練をするために書かれました。主は人間の言語を用いてそうすることを選ばれ、人間の言葉によって御自分の考えや思いを明らかになさいました。イスラエルをエジプトから救出することで、神は御自分のメッセージをすべての人に伝えるための一つの国民をお選びになりました。そして、その民が彼らの言語であるヘブライ語（ごく一部は、ヘブライ語とつながりのあるアラム語）を使って御言葉を伝えるようにされたのです。

ギリシア文化の台頭によって新しい機会がもたらされ、新約聖書は世界共通語のギリシア語という（当時、あの地域で広く話されていた）言語によって書かれることになりました（そのうえ、旧約聖書もギリシア語に翻訳されました）。この「世界共通」の言語のおかげで、キリストの死後、新たな宣教の熱意を持って使徒たちや初代教会は、広範囲にメッセージを広めることができたのです。のちに使徒ヨハネは、「神の言葉とイエス・キリストの証し、すなわち、自分の見たすべてのことを証し」（黙1:2）しました。このようにして聖書は、聖書の最初の記者から最後の記者に至るまで、靈感を受けた「証人」と「証し」の連続性を示しています。

問2 申命記32:46、47を読んでください。イスラエルの子らが「この律法〔教え〕の言葉をすべて」（申32:46）守ることは、なぜ重要だったのですか。神の言葉によって、私たちはいかに「長く生きる」ことができますか。今日の私たちの状況において、それはどういう意味ですか。

自国語に翻訳された聖書を単に持っているだけでなく、自国語の聖書のさまざまなバージョンを持っている人たちがいます。自国語の聖書があるとしても、たった一つの訳しかない人もいるかもしれません。しかし、あなたが何を持っていようと、重要なのは聖書を神の言葉として大切にすることであり、最も重要なのは、それが教えることを守ることです。

神の言葉に従い、それを自分の子どもたちに教えることは、なぜ「むなしい」（申32:47）ことではないのですか。

あらゆる言語には、豊かで深い意味を持つ言葉があり、それらを一つの言葉でほかの言語に的確に置き換えることは困難です。そのような言葉の意味の広さを理解するには、聖書におけるそれらの使い方を詳しく調べる必要があります。

問3 列王記上3:6、詩編57:4(口語訳57:3)、66:20、143:8、ミカ7:20を読んでください。神の慈しみと慈愛の御手は、いかに被造物に差し伸べられていますか。

「慈しみ」に相当するヘブライ語(ヘセド)は、旧約聖書の中で最も豊かで深い言葉の一つです。この言葉は、神の愛、慈愛、慈しみ、御自分の民に対する契約の態度などを言いあらわしています。先のわずかな聖句の中に、次のような神の姿が見られます。「あなたの僕、……ダビデ……に、……あなたは……豊かな慈しみ(ヘセド)をお示しになりました。またあなたはその豊かな慈しみ(ヘセド)を絶やすことなくお示しにな……られました」(王上3:6)。「神よ、遣わしてください、慈しみ(ヘセド)とまことを」(詩編57:4〔口語訳57:3〕)。イスラエルに関して、神は「ヤコブにまことを／アブラハムに慈しみを示してください」(ミカ7:20)ます。聖書全巻は、私たちに對する神の慈しみと愛の深さを捉えようとして、この「ヘセド」という言葉について書かれたのです。

問4 民数記6:24~26、ヨブ記3:26、詩編29:11、イザヤ9:6、32:17を読んでください。これらの聖句の中で語られている「平安」「やすらぎ」「平和」と訳されているもの(シャローム)とは何ですか。

「シャローム」というヘブライ語は、しばしば「平安」「やすらぎ」「平和」などと訳されます。しかしこの言葉の意味は、もっと深く広いものです。「シャローム」は、「全体性」「完全性」「幸福」などと訳することもできます。神の祝福と情け深さは、私たちを「シャローム」の状態に保ちます。それは神からの賜物です(民6:24~26)。対照的に、ヨブの苦しみの体験は、彼に「シャローム」がないので、「静けさも、やすらぎも失(う)」状況を生み出しています。あわただしいこの世において、「シャバット・シャローム」という言葉とともに安息日を迎えることは、大きな祝福です。なぜなら、神との交わりは、私たちの人生が強く願い求める究極の平安と全体性を提供するからです。

ヘブライ人の考えの中には、意味を強め、概念の重要性を強調する方法がいくつかあります。ヨーロッパの言語とは異なり、原語のヘブライ語には句読点がないので、その言語構造は、強調のためのほかの方法を生み出しました。

問5 創世記1:26、27、イザヤ6:1~3を読んでください。これらの箇所では、何という言葉が繰り返されていますか。繰り返されているこれらの言葉は、繰り返しによって取り入れられる別の概念によって、いかに強められていますか。

ヘブライ人記者が神の特定の性質を強調するために用いた方法の一つは、その性質を3回繰り返すことでした。天地創造物語が神の創造の業の頂点に達したとき、その聖句は創造された人間の特別な重要性を強調しています。「創造する」という意味の「バーラー」という動詞は、常に神が主語の場合にだけ用いられます。つまり、既存の物質に頼ることなく創造する力を持っておられるのは神だけだということです。この聖句はここで人間の創造を描いています——「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」（創1:27）。「創造」という言葉が3回繰り返されている点に注目してください。このようにしてモーセは、人間が神によって創造されたこと、また神にかたどって創造されたことも強調しました。これらの真理が彼の強調点でした。

イザヤの幻と召命の中で、セラフィムは、「聖なる、聖なる、聖なる〔万軍の主〕」（イザ6:3）という言葉を繰り返しています。強調点は、神殿を栄光で満たしておられる畏怖すべき神の聖さにあります。私たちはまた、イザヤが全能者の前に立ったときにも、預言者の次の言葉を通してこの聖さを見ます——「災いだ。わたしは滅ぼされる」（同6:5）。イザヤのような預言者でさえ、神の聖さや御品性に向かい合って、自分の無価値さにたじろぎました。このように、パウロが人間の罪深さと救い主の必要性を明らかにする（ロマ1~3章）はるか以前のここにおいてさえ、聖書が人類の墮落した性質を表現していることがわかります。その墮落した性質は、イザヤのような「善良」な人の中にもあるのです。

ダニエル3章では、「王の建てた像」という句（とそれを少し変化させた表現）が繰り返されています（ダニ3:1~3、5、7、12、14、15、18参照）。この句とそれを少し変化させた表現は、3章の中で10回繰り返されていますが、それは、ネブカドネツァルがダニエルを通して神から示された像（同2:31~45）に逆らって行動していることを目立たせるためです。ここでの強調点は、人間が唯一の真の神、礼拝に値する唯一のお方ではなく、自分自身を神とし、礼拝されようとすることに置かれています。

聖書の中の言葉は、常に文の中で登場します。言葉だけでは成立しません。一つの言葉には、一つの文の中における直近の文脈があり、まず理解すべきは、その文脈です。次に、その文脈が登場する全体的なより大きな構成があります。それは文章の1段落、1章、あるいは数章かもしれません。間違った結論に至らないためには、言葉や文脈を可能な限りよく理解することが大切です。

問6 創世記1:27と2:7を比較したあと、同2:15~23を読んでください。これらの異なる聖句と異なる文脈から、私たちは「アダム」(「人間」に相当するヘブライ語)の定義を、いかに理解することができますか。

私たちはすでに、創世記1:27における「バーラー」という言葉の繰り返しが人間の創造を強調していることを見ました。ここでは、この聖句の文脈の中で、「人」が「男と女」として定義されていることに目を向けます。つまり、「人」に相当するヘブライ語の「アダム」という言葉は、この箇所では人間や人類の総称として理解されるべきであるということです。

しかし創世記2:7では、この「アダム」という同じ言葉が、「土」(ヘブライ語で「アダマ」、言葉遊びに注目)の塵からアダムを造ることに言及するために用いられています。ここでは、男性のアダムだけを指しています。なぜならエバは、その後、まったく異なる方法で造られるからです。このように、二つの章の文脈の中でさえ、それぞれの箇所では「アダム」の定義に違い(創世記1:27の「人」と2:7の男性の「アダム」)が見られます。アダムが1人の人間であることは、のちに系図(創5:1~5、代上1:1、ルカ3:38)や「第二のアダム」(ロマ5:12~14参照)となられたイエスへの言及の中で確認されます。

「アダム」という言葉が特定の聖句の中に登場するように、アダムとエバの創造の文脈は、(創世記1、2章に見られる)より大きな天地創造物語の中に見いだされます。この天地創造物語が、より大きな構成に相当するものです。この構成は解釈する人に、新たな主題、考え、展開が加わることを知らせます。創世記2:4~25は、第二の創造物語と時折呼ばれたりしますが、実際には、強調点に違いがあるにすぎません(来週の研究参照)。しかしどちらの物語においても、人間の起源が明確に示されています。

おわかりのように、男と女(人間)は、神によって直接造られました。このことは、私たちが単なる偶然から生じたと教える「世の知恵」(Iコリ1:20)がいかに愚かしいかということについて、何を教えていますか。

聖書における最も大きな構成単位は、聖書の書巻です。聖書の書巻は、異なる目的のために、異なる状況において書かれました。預言的メッセージとしての役割を果たしたのもあれば、詩編のように、編集されたものもあります。列王記上下のような歴史書もあれば、パウロたちによって書かれた書簡のように、さまざまな教会に宛てられた手紙もあります。

一つの書巻の意味やメッセージを理解しようとするとき、だれがどういう状況で書いたのかということから始めることは重要です。聖書の多くの書巻は、記者が特定されています。旧約聖書の最初の五つの書巻は、モーセによって書かれたことがわかっています（ヨシュ 8：31、32、王上 2：3、王下 14：6、21：8、エズラ 6：18、ネヘ 13：1、ダニ 9：11～13、マラ 3：22〔口語訳 4：4〕）。このことは、イエスや（マコ 12：26、ヨハ 5：46、47、7：19）使徒たち（使徒 3：22、ロマ 10：5）によって裏づけられています。別のケースでは、記者が特定されていません（例えば、エステル記やルツ記の記者は、サムエル記や歴代誌など、多くの歴史書の記者と同様、わかりません）。

問7 創世記 15：1～5、22：17、18 を読んでください。モーセが創世記を書いたということは、私たちにとってどのような意味がありますか。

出エジプト記から申命記は、言うまでもなく、出エジプト後にモーセが書きました。しかし創世記は、天地創造から族長時代に至るまでの神の業の歴史として基礎を成しているのです。出エジプトの前に書かれたと考えるほうが理にかなっています。

「モーセは、年月の経過とともに、羊の群れとさびしい場所を放浪しつつ、民の苦しい状態について考えた。彼は父祖たちをあつかわれた神の方法や、選民の嗣業として与えられた約束を思い返して、日夜イスラエルのために祈りを捧げた。天使がモーセの回りを明るく照らした。モーセは、ここで、神の靈感を受けて創世記を書いた」（『希望への光』126 ページ、『人類のあけぼの』上巻 285 ページ）。

私たちは創世記によって、人間の起源についてだけでなく、救済計画や神が墮落した人類を救うために用いられる手段についても教えられています。この計画は、神がアブラハムと交わされた契約によって一層明らかになります。その契約には、アブラハムを通して偉大な国家を築き、「子孫を天の星のように、海辺の砂のように増やそう」（創 22：17）という神の約束が含まれていました。

参考資料として、『各時代の大争闘』第5章「改革の明星ウィクリフ」、第8章「われここに立つ——国会におけるルター」を読んでください。

「神は、みことばを通して、救いに必要な知識を人間にお与えになった。われわれは、聖書を、神のみことばについての権威ある、まちがいのない啓示として受けとらねばならない。聖書は品性の規準であり、教理を示すものであり、経験を吟味するものである。……

しかし、神がみことばを通してみところを人間に啓示されたからといって、聖霊のたえざる臨在とみちびきが不要になったわけではない。それどころか、聖霊は、みことばを神のしもべたちに開き、その教えを解明して実行に移させるために、救い主によって約束されたのである。しかも、聖書に靈感を与えたのは聖霊だったのであるから、聖霊の教えがみことばの教えと相反するということはあり得ないのである」（『希望への光』1592ページ、『各時代の大争闘』上巻（3）、（4）ページ）。

話し合いのための質問

- ① 自国語に翻訳された聖書がどれほどあるかにかかわらず、あなたが持っているものを最大限活用するために、あなたはどのようなことができますか。どうしたら聖書を神の言葉として大切に、信仰によって、それが教えることに従うことができるようになるのでしょうか。
- ② 人間の起源について神の言葉が教えていること（私たちは神によって天地創造の6日目に創造されたということ）と、「科学」の名の下に、人間自身が教えていること（私たちは何十億年もかけて進化したということ）の違いについて考えてください。両者の間の著しい差異から、聖書が教えることに堅く立つことがいかに重要であるかについて、また人類は、神の言葉とそれが明白に教えることからそれときにどれほど遠くへ離れてしまうかということについて、私たちは何を学ぶべきですか。
- ③ イスラエルの子らは、彼らにゆだねられた大いなる真理を自分の子どもたちに教え、彼らの人生における神の導きに関する物語を繰り返し語るように言われました（申4：9）。信仰を伝えることの明らかな利点はさておき、私たちの人生における神の導きに関する物語を教えることや語ることのどういところが、私たちの信仰を強めるのですか。言い換えれば、聖書の真理をほかの人に伝えることは、なぜ私たち自身にとっても有益なのでしょう。